

棒を用いる民俗行事と民俗芸能 突き技と組打ち技 を中心に

著者	中村 茂子
雑誌名	芸能の科学
号	25
ページ	39-57
発行年	1997-03-28
URL	http://id.nii.ac.jp/1440/00003046/



棒を用いる民俗行事と民俗芸能

——突き技と組打ち技を中心に——

中
村
茂
子

はじめに

一 突き技と組み打ち技の意義

1 東大寺修二会の牛玉杖による儀礼

2 神戸市の鬼追い行事と国東半島の修正鬼会の儀礼

ア 神戸市鬼追い行事の子鬼の棒

イ 国東半島修正鬼会の香水棒

3 鹿児島県に分布する御田植祭の棒踊り

二 突き技と組み打ち技の変容

1 田楽芸の「ランジヨウ」

ア 新野の雪祭り

イ 鳳来寺田楽

2 長田神社追儺式

おわりに

はじめに

民俗行事および民俗芸能には、多くの場面で棒が用いられている。棒の用途によって素材や形が異なるのは勿論であるが、棒を扱う技法によってその意味も変化してくる。

例えば、壬生狂言（京都市中京区 壬生寺）では、伝承演目の多くにさまざまな役が、棒振りの面棒・紅白面棒・白面棒・鉄棒などと呼ばれている棒を持って舞台に登場している。棒振りの面棒は、青と白の布をだんだん巻にした棒の両端に五色の紙垂をつけたもので、結願日の最終演目である「棒振」専用の棒であり、棒振り役がこの棒を用いて上下左右四方八方へ曲芸的に回転させる。紅白面棒は、紅白の布をだんだん巻にした棒で、「餓鬼角力」など鬼の登場する演目で、赤鬼・黒鬼・子鬼が亡者を痛めつける武器として用いる。白面棒は、白い布だけを巻いた棒で、亡者や老人のような弱者の役が杖にして登場している。また、「蟹殿」という演目では、猿に痛めつけられた蟹に味方する鯉・臼・栗などの役が白面棒を、猿方が紅白面棒を用いて合戦をする。さらに、役鬼である茨木童子は、鉄棒を持って舞台に登場し、紅白面棒を用いる並の鬼にはない特別な呪力をもった鬼であることを象徴している。

また、神戸市の各地には年の初めに行われている鬼追い行事が分布しており、人々に一年の幸せと五穀豊穡をもたらす主役の大鬼が登場するのに先立って、偶数の子鬼（伝承地によって子鬼の数は二名〜四名）が登場し、手に持った棒で地面や床を突く。その後、二名が組になって相互に棒を打ち合わせる技を演じ、突く演技と打ち合わせる演技を何度か繰り返す。

右に示した他にも、棒を用いる民俗行事や民俗芸能は全国的に数多く分布し、その目的が多種多様であるのと同様に、様々な行事名、芸能の種目名・演目名で伝承されている。これらの民俗行事・民俗芸能を個々に捉えていたので

は、全体を理解するのが困難である。すでに京都府や滋賀県など、棒・太刀・長刀・鉾を採り物とした民俗芸能の分布地域では、それらを類型的に捉え、次のような分類名が定着している。①組太刀型（二人一組を基本に打ち合う形式）②大太刀型（一人芸を基本に打ち合わない形式）③折衷型（組太刀型と大太刀型の折衷形式）以上、三分類の総称を太刀振と命名している⁽¹⁾。

筆者は、右の分類および分類名を考慮しつつ、棒を用いる民俗行事・民俗芸能の技法を次のように分類した。

- ① 振り技（壬生狂言の「棒振」や津和野の「鷺舞」の棒振りの演技に類する技法）
- ② 突き技（神戸市鬼追い行事の子鬼や国東半島の修正鬼会の僧によって行われる棒で床や地面を突く技に類する技法）
- ③ 組打ち技（壬生狂言「蟹殿」などの合戦場面や、鹿児島県・沖縄県などに分布する集団の棒踊りで相互に棒を打ち合わせる演技に類する技法）

- ④ 折衷技（①と③、①と②、②と③、①と②と③およびその他の技法などを組み合わせた技法）
- これらの総称を棒技（ぼうぎ）とする。

本論では、右の分類にしたがって突き技と組打ち技を中心に、その意味を追究してみたい。なお、振り技については、「その発生と展開」として、別に論考を準備している。

一 突き技と組打ち技の意義

先に、神戸市に分布している鬼追い行事で、主役の親鬼に先だって登場してくる子鬼の棒による突き技と組打ち技の例をあげた。子鬼が持つ棒は牛王杖の一種と考えられ、「お水取り」の名でよく知られている奈良東大寺の修二会でも、牛玉（以後、東大寺の場合のみに玉と記す）杖による突き技と組打ち技が、練行衆によって行われている。神戸市

の鬼追い行事や国東半島の修正鬼会などは、古い時代から中央寺院で行われてきた修正会・修二会の地方化された伝承であり、仏教行事の中で行われている牛玉杖によるさまざまな儀礼も、棒技の突き技と組打ち技の一種として捉えることが可能である。したがって、初めに最も古い伝統を持つ東大寺修二会にみられる、牛玉杖の儀礼としての突き技と組打ち技について、それぞれがどのような場面でも何を目的として行われているかを理解しておきたい。なお、東大寺修二会については、『東大寺お水取り―二月堂修二会の記録と研究⁽²⁾』を参考にした。

1 東大寺修二会の牛玉杖による儀礼

東大寺二月堂で行われている修二会（修二月会）は、東大寺の開山良弁僧正の高弟であった実忠和尚が、天平勝宝四年（七五二）に始めたと伝えられ、二月に二月堂の本尊である十一面観音の前で一日に六回、一四日間に亘って籠りの僧たちが過ちを懺悔すること、国家万民の平安を祈願する「十一面悔過」であるという。

現行の修二会は、二月二〇日から三月一五日の約一か月におよび、練行衆と呼ばれる役割分担の異なる十一名の僧侶が参籠し、ほかに練行衆を補佐する多数の人々の奉仕がなされて、総勢三五〇六名で執行されている。十一名の練行衆は、二月二〇日から二八日までの前半九日間を別火による精進潔斎の生活になり、この間に後半の本行の準備をして、三月一日から二週間におよぶ本行に入る。本行は前半を上七日、後半を下七日に分け、さらに一日を「六時の行法（日中、日没、初夜、半夜、後夜、後夜、晨朝）」に分けて、さまざまな声明と所作を伴う厳しい行法を毎日繰り返す。「六時の行法」のうち、初夜と後夜を大時と呼んでおり、より複雑な内容になっているばかりでなく、細部では一四日間の毎日が違った行法によって構成されている。

例えば、毎日行う「六時の行法」の他に、日によって以下のようなさまざまな儀礼が付加される。

三月一二日夜半過ぎには、堂下にある若狭井から香水を汲んで観音に供える「水取り」が行われる。

三月一二日～一四日の後夜の終わりには、堂内で行われる火の行法「達陀」と練行衆が内陣を走りまわって、最後に五体投地をする「走り」が行われる。

三月五日と一二日の初夜には、「過去帳」が読み上げられる。

この大法会において牛玉杖が用いられているのは、三月一二日の水取り以後、一五日までの四日間である。三月一二日に用途別の牛玉杖数種が、練行衆全員によって準備され、内陣に持ち込まれる。牛玉杖は柳の枝で作られ、長さ一八〇センチ程の棒の太い方の先端に牛玉札を挟むための十文字の割れ目を入れたもので、一二日の水取りが行われる前に練行衆全員に配られるものである。また、この日に須弥壇の表面と壇下四隅に飾る牛玉杖飾り用のものや、達陀で八天の一役が用いる楊枝など、それぞれ長さが違った牛玉杖が作られる。一二日に練行衆全員に配られる牛玉杖は、水取り後の六時の勤行毎に、香水の靈力を増大させる香水加持の目的で、練行衆が左手に持って床を突きながら行道する。この時、行道する練行衆は、右手に持った鈴や差懸でたたましい音をたてるので、聴聞者は牛玉杖で床を突く音を聞き取ることは不可能である。

三月一五日、午前一時過ぎに結願作法のために上堂した練行衆は、司から牛玉杖を受け取って各自の牛玉箱や掛本尊などを藤臺で牛玉杖に括りつけ、これを自席に立てかけておく。「内陣涅槃講」という法要の後に堂内が清められ、練行衆は牛玉杖を持って互いにぶつけ合って加持する「互為加持」という作法が行われる。このような牛玉杖による突き技と組打ち技の作法は、全く別の時に別の目的で行われている。前者は若狭井から汲み上げた香水の靈力を増し、後者は修二会の行法を終了した練行衆に、仏菩薩の加護と法力を付与する呪術であって、両者とも靈力を増大するための呪術であるという点で共通している。

東大寺修二会における練行衆の牛玉杖による突き技（香水加持）と組打ち技（互為加持）が、いつ頃定着した作法であるかは不明である。『東大寺お水取り―二月堂修二会の記録と研究―』の頭注として、次のような記載がみられる。

「この法会における牛玉宝印説話が承安元年（一一七一）のこととして弁曉に仮託されており、また牛玉宝印授与の作法は一五世紀初頭に確立しているから（略）、院政期末に京中の諸寺で行われていたそれとかかわりながら定着したものであろう⁽³⁾。したがって、院政期には中央寺院の修正会・修二会において、牛王杖の突き技、および組打ち技が練行衆によって行われていたと考えることができよう。

2 神戸市の鬼追い行事と国東半島の修正鬼会の儀礼

ア 神戸市鬼追い行事の子鬼の棒

神戸市には現行で八か所に鬼追い行事が伝承されており、廃絶地域四か所を含めて、かつて一二か所で鬼追い行事が行われていた。これら一二か所の鬼追い行事は、すべて類似した伝承であることはいうまでもない。長田区に鎮座している長田神社追儺式を除く、一か寺の鬼追い行事に共通した伝承の一種に、二名（二四名（偶数）の子鬼による折衷技（突き技と組打ち技）が伝承されている。棒を持った偶数の子鬼たちは、主役である親鬼（または大鬼）の登場に先立って登場し、手にした棒で堂の床や地面を突く突き技と、二名一組で相互に棒を打ち合わせる組み打ち技とを交互に繰り返す。伝承地によっては、鬼追い行事が始まる前に住職を中心として行われる堂内の行事の最後に、住職の唱える般若心経に合わせて檀家の人々が、牛王杖で堂の床を突く行法を伝えている。

この行事にみられる子鬼の折衷技や檀家の人々の牛王杖による突き技は、どのような意味を持った儀礼なのであろうか。次に記す国東半島の各地に伝承されている修正鬼会の香水棒による折衷技（突き技・組打ち技・その他の技）の儀礼と併せて、その意味を追究してみたい。

イ 国東半島修正鬼会の香水棒

国東半島において、現在も修正鬼会を伝承しているのは、天念寺（大分県豊後高田市長岩屋、旧正月七日、西組と中組の合同）、成仏寺（大分県国東郡国東町成仏、旧正月五日、東組）と岩戸寺（大分県国東郡国東町岩戸、旧正月七日、東組）の三か寺であり、東組の二か寺は隔年交替で執行している。これら三か寺の修正鬼会は、一九七七年に国の重要無形民俗文化財に指定されている。伝承地ではこの行事をオニヨ、またはオニオと呼び、その起源については、次のように伝えている。

国東六郷満山を開いた仁聞菩薩が、養老年間（七一七～七二四）の頃、国家安穩、五穀豊穡、万民快樂の諸願成就を祈願して、国東郡六郷二八か寺の天台僧を集め「鬼会式」六巻を下賜した。これを拝受した各寺々は、日本六十余州の神仏を勧請し、大法要を勤修したのが、修正鬼会の起源であるという。

修正鬼会の行事内容は、東組（成仏寺・岩戸寺）と西組・中組（天念寺）で多少異なる部分もあるが、東組を例に記すと次のような次第で構成されている。

①本堂の行事 ②タイアゲ ③講堂での行法（読経と立役）。

三か寺では、例年僧による勤行の次第と、役僧名を記した「差定（さじょう）」と称するものを作成して行法を進行している。東組の岩戸寺を例に示すと、次のような差定になっている。

①伽陀 ②懺法導師 ③序音 ④回向 ⑤初夜 ⑥仏名 ⑦法呪師（はずし） ⑧神分（じんぶん） ⑨三十二相 ⑩唄匿（ばいのく） ⑪散華 ⑫梵音（ぼんのん） ⑬縁起 ⑭錫杖 ⑮米華（まいけ） ⑯開白（かいびやく） ⑰香水 ⑱四方固 ⑲鈴鬼 ⑳災払鬼 ㉑荒鬼 ㉒鬼後呪（それぞれの下に寺名と僧名が記される）。

右の差定に示された⑮米華から㉒鬼後呪までを「立役」と呼び、香水棒（伝承地では「こんずいぼう」と呼ぶ）による折衷技（突き技・組打ち技・その他の技）が行われるのは、⑯開白と⑰香水である。前者では、二名の僧が右手に香

水棒を持って本尊に向かって並び立ち、読経に合わせて足踏みをしながら香水棒を上下に動かす。次に並んだまま五方に向かつて、五方龍王に水の清浄を祈願して呪文を唱え、香水棒を横に持って上下に動かし、次のような経文「此水在我、為我水、入護八ツ般若波羅密多内外清浄、法会香水陀羅尼ノ法印呪」の最後の部分を唱えながら香水棒を打ち合わせ、一回転して香水棒で地面を突く。

後者は「打香水（うちこうずい）」と「合わせ香水」という二種類の法舞で構成されており、これを六回繰り返す。黒い道服を着け、下駄履きの僧二名が向き合って、下駄で拍子をとるつつ右手の香水棒を上下に動かし、次に相互の香水棒の端を握りあって横に振り、握り合ったまま身体をくねらせて旋回し、「滅罪香水」「釈迦香水」「弥勒香水」などの経文の結句である「オンソワカ」という部分で一回転して香水棒で地面を突く。この香水棒は、閼伽水を象徴したものであり、香水棒を駆使してのさまざまな行法は、閼伽水の霊力を増すことと、その閼伽水を仏菩薩に供えることを意味し、この行法を行うことによって仏菩薩の加護と、霊力を身につけることを目的としている。

土地の伝承では、香水棒による行法は仁聞・法蓮という二名の僧が、滝に打たれて修業している姿を表現し、後に仁聞は不動明王の化身である黒鬼に、また、法蓮は愛染明王の化身である赤鬼になって登場すると伝えている。したがって、⑯香水は、鬼役になる僧が勤めるのが本来であるが、体力的、時間的な理由などもあって、別の僧が代わって勤める場合が多い。

二本の香水棒は、長さ八〇センチ、直径五センチのテラ柏の皮を剥き、四段に削り花をつけた削り掛けの一種であり、これを使用した折衷技が行われる⑯開白と⑰香水の他には、次のような場合に用いられている。

差定⑱法呪師の行法において、二名の法呪師が剣・鈴とともに香水棒を持ち、堂役を従えて本尊の前で礼拝を繰り返して加持をする。また、立役の最初の行法であり、吉祥天に五穀成就を祈願する⑲米華の時にも、道服、下駄履きの僧二名が、右手に香水棒を左手に白米・切り薬・ミツタマ（餅）・ヒツタマ（餅）を載せた朱塗りの膳を奉持して登場

し、祈願の文言を唱えながら下駄音高く足踏みをして香水棒を上下に動かし、膳に載せた餅・白米・藁を撒く。参拝者は競ってこれらを拾い、餅を拾って食べれば健康に、白米を食べれば病氣除けに、藁で身体の痛いところを巻けば治癒するとして持ち帰る。また、西組の天念寺ではこの時に牛王杖も一緒に撒かれ、参拝者はこれを拾って持ち帰り、田の水口に立てておくと、虫除けになると伝えている。

香水棒による棒技の目的は、東大寺修二会に見られる練行衆の牛王杖による行法の目的とほぼ同様であり、香水そのものを具象化して牛王杖による作法を華やかな法舞としての所作に仕立てたものである。

翻って、神戸市の鬼追い行事に見られる子鬼の折衷技（突き技・組打ち技）について考えてみたい。この折衷技について、伝承地ではすでにその意味を聴取することができなかった。しかし、この折衷技は、除災招福のために出現する大鬼の登場に先立って行われているところから、本来、東大寺修二会の牛王杖による棒技や、国東の修正鬼会の香水棒による折衷技と同様の目的で行われて然るべき状況である。子鬼の後に登場する大鬼が、最終的に餅割をして氏子や参拝者に分配し、新しい年の健康と五穀豊穡を祈るという、行事の目的は一致しているのである。したがって、神戸市の鬼追い行事や国東半島の修正鬼会の棒技は、東大寺修二会に伝承されている牛王杖による棒技の地方的展開の一種と考えることができる。

3 鹿児島県に分布する御田植祭の棒踊り

鹿児島県には数多くの棒踊りが分布している。特に、旧薩摩藩に属していた地域（霧島山麓一帯・薩摩半島中心部）には、この地域独特の棒踊りが伝承されている。独特といえる理由の一つは行われる時期で、春から初夏にかけて氏神や馬頭観音の御田植祭に奉納されている。独特といえるもう一つの理由は、豊作祈願を目的として奉納されていることである。

現行の棒踊りは、青年男子十数名が白鉢巻き、紺の浴衣に襷をつけ、草鞋履きの姿で六尺棒、または三尺棒、作り物の鎌、長刀（または鉈）などを持ち、二、三列縦隊になって独特の節回しの歌に合わせて相互に棒を打ち合わせつつ踊る棒の組打ち技である。しかし、下野敏見氏の「薩摩棒踊りの成立考」⁽⁵⁾によれば、これらの地域に伝承されている棒踊りは、棒で地面を突く突き技の方に本来の意義があり、その目的は豊作祈願であったことが指摘されている。以下、下野氏の論旨を要約して記してみよう。

この地域の棒踊りは、六尺棒対六尺棒、三尺棒対三尺棒、六尺棒対三尺棒という三通りの基本型があり、それに鎌・長刀（または鉈）・錫杖・尺八などを組み合わせた一五通りの型がある。六尺棒以外の三尺棒と作り物の鎌や鉈の柄にあたる部分には、削り掛けのような形に藁の房をつけてあり、この形態から呪具を意識した採り物であることが想像できる。

また、棒踊りは、出端↓中の踊り↓引き端で構成され、出端と引き端の時に踊り手全員で道歌を合唱しながら、右手に持った六尺棒で地面を突きつつ踊り場へ行進し、また元の場所へもどる。その際、左手の三尺棒と鎌は腰にあてている。神前で踊られる中の踊りは、すでに記したように二、三列縦隊で何通りかに棒の組打ち技を演じる。さらに、棒踊りの前後には、ヤマ（伝承地によってシベとも）と呼ばれる人々が付随して芸能を演じる。棒踊りの前に演じるものをサキヤマと呼び、後に演じられるものをアトヤマと呼ぶ。サキヤマは、削り掛けのような標の山を持った一名が棒踊りの踊り手の先頭に立ち、その標の山を囲む形で数人の歌方がついて、中の踊りの歌をうたう。対するアトヤマは、棒踊りが終了した後に踊り手の後ろから標の山を囲んだ一団が、歌をうたいながら退場することをいい、伝承地によっては棒踊りの後に演じられる狂言やさまざまな踊りなど、余興芸術的な芸能を含めた名称にもなっている。

特に、霧島山麓一帯と薩摩半島中部に分布している御田植祭には、棒踊りとは別に祝い棒が立てられ、田歌がうたわれる。標の山にあたる祝い棒の形は、伝承地によって多少異なっているが、これを数人で囲み、田歌をうたいながら

時々祝い棒を持ち上げて地面を突く。この時歌われる田歌は、棒踊り歌の本歌である。中の踊りは、田歌を縮小した歌をうたいながら踊る。前後のヤマ（シベ）に田歌をそのまま流用して歌うことで、豊作祈願の御田植祭に奉納した。

薩摩は、江戸時代以前から武術としての棒術が盛んな土地柄であり、天正時代（一五七三～一五九二）の頃には棒術の流派が成立していた。棒踊りの芸態は、室町末期から江戸初期にかけて近畿地方を中心に大流行した風流踊に、現在大口市に本部を構えている棒術の浅山流と示現流の技を取り入れて、江戸時代の初期に成立したものであるという。

筆者は、勇壮な組打ち技として知られる薩摩の棒踊りが、稲作の豊穰を祈願する祭りと深く結びついて伝承されてきた芸能であり、余興的に付随しているヤマ（シベ）の田歌や棒の突き技の方に本義があるという、下野氏の指摘を納得することが出来る。何故なら、田植に際して、唱えことをしながら棒の突き技を行う所作の中に、早苗の育成にとって欠くことのできない大地や水の靈力を増大させる呪術の伝承を認めることができるからである。したがって、薩摩の棒踊りとして認識されている組打ち技の方が、むしろ後に余興芸として展開した芸能であり、現行では余興芸的な意図で付与されたようにみえる、サキヤマ・アトヤマに演じられている突き技が、本来の目的とする部分であった。このような薩摩の棒踊りにみられる組み打ち技の例は、突き技の変容の一形態と考えることが可能である。

次に、芸態の変容にともなうその意味まで変化し、または、意味不明になってしまいう例について考えてみたい。

二 突き技と組打ち技の変容

先に記した東大寺修二会において用いられている牛玉杖や、国東に伝承されている修正鬼会の香水棒による棒技（突き技・組打ち技）は、閑伽水の靈力を増大させ、仏菩薩の加護と靈力を人々に付与する呪術であり、神戸市の鬼追行事の子鬼が用いる棒の折衷技も、突き技・組打ち技に対する直接的な意味は不明であるが、最終的には新しい年の平安

と、五穀豊穡を祈る呪術の一端を担っている棒技であることを究明した。

次に、中部日本に分布し、かつて寺院の修正会、または「おこない」として行われていた田楽系芸能の、棒を用いる儀礼と芸能の意義について考えてみたい。

1 田楽芸の「ランジョウ」

ア 新野の雪祭り

雪祭りは、長野県下伊那郡阿南町新野の伊豆神社で、一月一四日の夜から一五日の明け方にかけて、新しい年の豊作を祈願して行われている様々な神事と芸能である。かつては御神事・田楽祭などと呼ばれていたが、大正一五年（一九二六）に折口信夫が述べた感想によって、雪祭りと呼ばれるようになったと伝えられている。現在でも伊豆神社の祭りとして行われているが、明治の廃仏毀釈以前には「二善寺のお祭り」とも称され、伊豆神社に合祀された二善寺観音の修正会（おこない）として伝承されてきた。二善寺観音は、室町時代に新野地方を領有した関氏の二代目盛貞が、享徳三年（一四五四）に隣村の向方（むかがた）から迎えたものと伝えている⁶。

祭りでは、神楽殿の儀、伽藍様への参拝、本殿の儀におけるそれぞれの神事と芸能が終了し、深夜を迎えて庭の儀に移る前行の一種として、棒を用いた「ランジョウ」が行われている。庭の儀は、舞庭（まいと）に立てられた大きな柱松に点火すべく、宝船に添えられた小松明の往復と平行して、境内にある庁屋（帳屋とも）と呼ばれている楽屋に相当する建物の板壁を、棒を持った若者たちが中心になって、「ランジョウ、ランジョウ」と叫びながら激しく叩く。

最終的には数人がかりで太い丸太を用い、力を合わせて板壁を突き破るような勢いで突く。宝船の九度目の往復で柱松の天辺に点火されると同時に「ランジョウ」も終わり、「ランジョウ」に応じるような形で、笹を持った田楽衆が、庁屋から勢いよく飛び出してきて乱舞する。続いて、「幸法（さいほう）」「田楽」「もどき」「田楽」という演目が長時

間に亘って演じられる。以下、「競馬（きょうまん）」「牛」「翁」「松陰」「しょうじつきり」「海道下り」「神婆（かんば）」「天狗（鬼様とも）」「八幡」「しずめ」「鍛冶」などの演目が、柱松の燃えさかる下で夜明けまで続き、燃え尽きる頃に庭の儀の芸能も終了する。

この「ランジョウ」については従来、庁屋に籠もっている神々の出現を他に予告する哮（たけび）のようなものと説明されてきた。しかし、筆者は、この「ランジョウ」を棒の突き技の変容としてより狭い意味に捉え、田楽衆が「幸法」と「もどき」に導かれて躍る「田楽躍」との関係においてのみの儀礼として伝播したものと考えた。従来の、神々の出現を予告する儀礼という解釈は、後に導き出されたものと考えたい。その理由は、愛知県の鳳来寺田楽に見られる「ランジョウ」と考えられる演目（「松のらんじ」「棒のらんじ」と「神天子の舞・一、二の舞・惣田楽・ろん舞（以上田楽躍）」との関係が、新野の雪祭りの「ランジョウ」と同様の意味を持つ儀礼であると考えた故である。次に、鳳来寺田楽の「ランジョウ」と考えられる演目について追究してみよう。

イ 鳳来寺田楽

鳳来寺田楽は、愛知県南設楽郡鳳来町の鳳来寺で、一月三日に行われている修正会の芸能である。鳳来寺は、文武天皇朝（六九七～七〇六）に、利修仙人が開山した寺と伝えられ、本尊は仙人自らが刻んだ薬師瑠璃光如来と伝えられている。歴史の変遷の中で、源頼朝により再興され、また、徳川三代将軍家光の時代に寺内に東照宮が建立されて、江戸時代を通して寺領一二〇石を有して隆盛を極めた。この寺に伝承されている田楽の起源について、慶安元年（一六四八）に法師長乳が記したという『鳳来寺縁起』には、次のような内容が記されている。⁽⁷⁾

昔、煙巖山には、赤・青・黒の三鬼が存在して利修仙人に仕えていた。仙人は入定に際して三鬼に対し、「汝等は吾に身命をなげうって、仏法のために此の山を守護せよ」と命じて三鬼の首をはね、その首は本堂の柱下に納められた。

鳳来寺田楽の次第

(『三州 鳳来寺山文献集成』〈河合重雄ほか編
愛知県郷土資料刊行会 1978年発行〉による)

三日(旧正) 田楽堂次第			
第 1	九度	第 14	神天子の舞(してんじのまい)
2	かんばやし	15	一、二の舞
3	松竹のはやし	16	惣田楽
4	国ずくし	17	ろん舞
5	五番の舞(御願の舞)	18	面申
6	万才楽	19	次の面申
7	鶯の舞	20	獅子伏
8	仏の舞	21	打開き
9	御礼(おんれい)	22	こいのり
10	松のらんじ	23	なりわい
11	扇のおがみ	24	鳥追
12	棒のらんじ	25	苗引ばこ楽(あそび)
13	棒の祝い	26	弓納
		27	田うた

因って、毎年正月三日と一四日の夜に、本堂、鎮守、常行堂において萬歳楽、獅子舞、田楽などを演じ、その役を演じる者は百日の精進を行った。特に、一四日の夜は鎮守、常行堂の行事を終わり、本堂での内陣の勤めの後、三名の僧が鬼に扮して手に斧を持ち、足拍子を踏んで七難を払い、七福を招く。その後、近郷の人々が手に手に松明をともし、棒を持って堂の内外で明け方まで歓喜踊躍し、これを鬼踊りといった。この祭りは、天下安穩の祈願と三鬼供養の目的で行われると伝えているという。しかし、現行の鳳来寺田楽には、鬼の登場や「鬼踊り」という演目も存在していない。

現行の田楽堂次第は、表に示した通りである。次第のうち、「9御礼 10松のらんじ 11扇のおがみ」と「12棒のらんじ 13棒の祝い」は、同一人によって演じられ、これらの演目は、次の「14神天子の舞 15一、二の舞 16惣田楽 17ろん舞(以上田楽躍)」と一連の演目である。「9御礼」以下「田楽躍」の前までの演目は、〈さいとう〉と呼ばれている年男一名によって演じられ、さいとうは、立烏帽子に筒袖着物、かるさん袴に赤褌、太刀を佩き、鼻高の

天狗面をつけて登場する。

「9 御礼」は、扇を右手に持ったさいとうが舞台中央に進み、獅子頭が安置された田楽堂の奥に向かって唱えごとをしながら三足前に出て拝礼、もどって拝礼という所作を東西に向かって、それぞれ三三九度に繰り返す。「10 松のらんじ」は、笛四名、大太鼓一名による囃子方がつき、さいとうは松の枝と扇を襟にさして登場し、東に向いて三拍子と七拍子に足拍子を踏み、襟から取った松の枝を三拍子と七拍子の足踏みを繰り返しながら東に向かって投げ、七拍子を踏み終わった時に、すべての松を投げ終わる。続いて「11 扇のおがみ」になり、開き扇を前に置いて三度拝礼をする所作を奥、東、西の三方へ三三九度に繰り返して、さらに、両手を合わせて上体を思い切り反り返らせ、大きな動作で拝礼することを三回ずつ三方へ繰り返して、開き扇を右手に持って奥に向かって三足に跳びだし、「おっと目出度し」と大声に唱えて終わる。

次の「12 棒のらんじ」は、右手に六尺棒を持ったさいとうが舞台奥に進み、東に向き直って笛に合わせて三拍子を踏みながら正面に直り、左手に棒を持ち替えて右手でこれをさする。次に右手で棒を持って左手でさすり、再度右手で棒をさする。東西に向かって同様の所作を三三九度に繰り返して、最後に奥に向かって三足に跳びだし、「おっと目出度し」と唱えて終わる。続いて「13 棒の祝い」になり、さいとうが奥に向かって六尺棒を突き立て、「ひあかし、棒受け取れ」という。ひあかしが出て、「受け取りましょう。お祝いなされ」と答える。棒を持ったさいとうが、次のような唱えごとをする。

「いと千ば、わた千ば、能登釜のくち、つくり俵百俵、竹槍七本、内女房十八人、外女房十八人、合わせて三十六人の内、己れが目についたを一人取り、のこせしはかはおっぱえ⁽⁸⁾」。この後に、14〜17の演目（田楽躍）が演じられる。

「10 松のらんじ」「12 棒のらんじ」という演目名が、「松のランジョウ」「棒のランジョウ」の転訛ではないかと考えた

理由は、雪祭りの「ランジヨウ」と田楽衆の関係、および「ランジヨウ」と「さいほう」「田楽躍」「もどき」「田楽躍」の後に、さまざまな仮面の神々が登場してくる芸能構成が、鳳来寺田楽の構成と共通していることに気づいたためである。鳳来寺田楽のさいほうによる「松のらんじ」「棒のらんじ」は、雪祭りの「さいほう」「もどき」の演目と対応するものであり、本来の構成は、「御礼・松のらんじ・扇のおがみ」（田楽躍）、「棒のらんじ・棒の祝い」「田楽躍」であったと考えることが可能である。したがって、「棒のらんじ・棒の祝い」（田楽躍）は、「松のらんじ・扇のおがみ」（田楽躍）の「もどき」として位置づけられた演目といえよう。

鳳来寺田楽も雪祭りの庭能も、さまざまな仮面の神々の登場に先立って、舞庭に登場してくる田楽衆に対して、「ランジヨウ」という唱えごとに象徴される儀礼（棒による突き技の変容）を行うことによって、田楽衆は仏菩薩の加護と靈力を付与されたことになる。このような芸能構成の中に組み込まれた「ランジヨウ」は、寒冷地住民の五穀豊穡を祈る気持ちの切実さを示しているといえよう。

2 長田神社追儼式

神戸市長田区の長田神社に伝承されている追儼式は、二月三日に行われており、先に記した神戸市に分布している鬼追い行事、現行八か所のうちの一か所に含めることができる。しかし、この追儼式には、先に例としてあげた折衷技を行う子鬼は登場していない。そのかわりに黒紋付き袴に正装し、大小の太刀を腰に差した太刀役と称する少年五名が登場し、「太刀踊り」を行う五匹の鬼役に対して、少年それぞれが、「太刀渡し」「太刀納め」という重要な役割を果たしている。この行事に少年五名の太刀役が加わったのは、明治になってからと考えられ、それ以前には、他寺の鬼追い行事と同様に棒を持った子鬼が登場して、棒の折衷技を演じていた可能性が高い⁽⁹⁾。

現行の演出は、明治時代の初期に従来の子鬼の装束を黒紋付き袴という人間の正装に変化させ、棒を太刀に替え

て、見せ場を設けた演出を現在まで継承したもので、これは、明らかに観客の眼を意識したものである。長田神社の追儺式は、明治時代の新演出によって、子鬼に続いて登場してくる主役の大鬼に対して、棒技による仏菩薩の加護と靈力を付与するという本来の意味を失ってしまったことになるのである。

おわりに

棒を用いる民俗行事・民俗芸能の突き技と組み打ち技の持つ意義、およびその変容について考察し、棒技が変容することで本来の意味が失われてしまうことを究明した。しかし、民俗行事・民俗芸能は、時代の流れや伝承地によって変容するのが当然であり、加えて、一九九二年に「地域伝統芸能等を活用した行事の実施による観光及び特定地域商工業の振興に関する法律（通称おまつり法）」の施行以後、新しい郷土芸能の創作に拍車がかかっている。このような時代であるからこそ、長年に亘って伝承されてきた民俗行事・民俗芸能の中に、わずかも残存している本来の形、本来の意味を検証しておくことが重要である。

棒技の振り技については別に論考を準備しているが、棒術の型を演じてみせる組み打ち技（例えば、愛知県各地に分布している「棒の手」など）についても追究したいと考えている。

本稿の執筆に際し、鹿児島県の下野敏見氏からご教示を、また鹿児島県の近藤津代志氏・滋賀県教育委員会の長谷川嘉和氏から資料の提供をしていただいた。記して感謝申し上げます。

注

- (1) 『近江のケンケト祭り・長刀振り (二)』(滋賀県教育委員会事務局編発行 一九八八年)二八七～三〇〇頁。
『京都大事典』地域編(上田正昭・吉田光邦監 淡交社 一九九四年)「太刀振」と「振物」の項目。
- (2) 堀池春峰著者代表『東大寺お水取り―二月堂修二会の記録と研究―』(小学館 一九九六年)。
- (3) 注(2)に同じ。一五六頁「牛玉宝印授与」の頭注。
- (4) 大分県文化財調査報告書 第三十九輯『国東半島の修正鬼会』(大分県教育委員会編・発行 一九七七年)一三〇～一三二頁。
- (5) 下野敏見「薩摩棒踊りの成立考」(『まつり』22号 特集・棒 まつり同好会 一九七三年)所収。
- (6) 『雪祭り』(中村浩・三隅治雄編 東京堂出版 一九六九年)四三頁。
- (7) 『三州 鳳来寺山文献集成』(川合重雄・河原慶一・小林正之ほか編著 愛知県郷土資料刊行会発行 一九七八年)四〇三～四頁。
- (8) 注(7)に同じ。四一七頁。
- (9) 中村茂子「神戸市の鬼追行事に見る民俗的意義―長田神社の追儺式を中心に―」(『芸能史研究』133号 一九九六年)。